

先ずは疑え



文学部教授 内田慶市

最近は「とんでもないこと」がよく起こるご時世のようである。これを書いている時に起こった「旧石器発掘ねつ造」などは、まさに「世紀末」を象徴する出来事の一つのようにも見える。世の中は重層化し、ますます複雑化しているように「現象」としては見うけられる。

しかしながら、チェスタートンの探偵小説に登場するブラウン神父も「奇妙な足音」の中で、次のように述べている。

「犯罪というものも、他の芸

術上の仕事と変わりありません。つまり、その完成された

姿はどれほど複雑であろうと、その中心は単純だとい

ことですね (I mean, that the

centre of it is simple, however much the fulfillment may be complicated.)」

ポオも同じように「ぬすまれた手紙」で、名探偵デュパンに

以下のように言わしめている。

「それがきわめて単純だとい

う点が、あなたがたを当惑

わせているんだな」

「きわめて単純」であることが、かえって人を迷わせるということはよくあることである。

「モルグ街の殺人事件」でも、デュパンは警察を批判して、「彼

らは、異常なことに難解なことを混同する」といふ、あの大きな、

しかしよくある誤謬に陥っている」と述べているが、まさにこれは現実である。「とんでもない」

「複雑怪奇」な「現象」も、事物の本質は「単純」であることは多いのである。

「旧石器発掘ねつ造」などは、実に「単純」なことである。それはその過ちを犯した本人の

「学者のモラル」とかそういう問題以前に、その周囲の人々、

或いはその学界全体に欠けている問題であるように思われる。

「モノ」至上主義と、何よりもそこには「何故?」という問い

かけの態度が全く見受けられないことである。

『毎日新聞』（2000・11・7）の「余録」で以下のように述べられている。

国立歴史民族博物館館長・佐原真さんは「信じることでなく疑うところが学問を前進させる前提だ」というドイツの考古学者の言葉を引いて、こう言っている。「ときには反対のための反対もよいと思います。反対意見に反論することで、論証がゆきとどいたものになり、さらに強固な見解となっていくこともあります。…信じてしまえば、そのことについての探究は確かに止まってしまいます」（岩波新書「発掘を科学する」。考古学に限らない。疑うことをやめてしまった人があちこちに大勢いる。

「ゼミナール拝見」というタイトルと随分離れたことを述べているように思われるかも知れないが、私のゼミナールの基本的立場はこれなのである。

「先ずは疑え」

私の専門は「中国語学」であり、特に最近では「近代における東西の言語文化接触」を中心に研究を進めている。従って、ゼミでも「日中」「日中欧」の対照研究をやる学生が多いのであるが、他のゼミとは異なり、懇切丁寧な「論文の書き方」とか語句の修正とかの指導は行っていない。「不親切」極まりないゼミなのであるが、要は「自分の頭で考える」ことである。自分が決めたテーマについて、自分で徹底的に資料を調査し（もちろん、テーマの選択や資料のアドバイスは行う）、自分なりの方法

で自分なりの結論を導き出していくように求めている。たとえば、その結論は間違っているとしても、それなりに「論」が矛盾なく展開されていけば「よし」とする。ただし、先行論文を読むときの「心がけ」だけは示してある。「疑って読め」ということである。すなわち、「通説を鵜呑みにしない」「権威に盲従しない」態度である。

過酷な就職戦線の中で、実質3年しかない大学生活の総括としての「卒論」であるが、中身よりも、その「取り組み方」（大げさに言えば「生き方」「世界観」を「卒論」をまとめる過程でつかんで欲しいと願っている。

「若さとは疑いながら生きること」でもあるのである。